



こ きゅうざんえんぎ 胡弓山縁起

最上一平

プロフィール

85年『銀のうさぎ』で当会
新人賞を、01年『ぬくい山
のきつね』で協会賞を受賞。
季節風、サークル拓同人。
近著は『ゆっくり大きくな
ればいい』。

千次^{せじ}は生まれながら目が見えなかった。小さい時に村の辻にすてられ、ひろったのが胡弓作りの職人だった。それで千次は、ことばを覚える前から、胡弓作りをしこまれた。青年になるころには千次は立派な胡弓作りの職人となった。千次の作る胡弓は音のよいことで評判をとった。その上、千次のかなでる胡弓の音色は、国で一番といわれるほどだった。

ある晩、胡弓をひいていると、戸口をたたく者があった。見目うるわしい娘だった。

「わたしは旅をしている者で、花々^{かか}と申します。あなたさまの胡弓の音色にさそわれて、つつい戸口をたたいてしまいました。もうしわけありません。どうぞ、もう一曲聞かせてください」

千次は、のこりもののかゆをすすめ、胡弓をひいて聞かされた。

こうして千次と花々は夫婦となった。

花々のために胡弓をひくようになると、千次の胡弓は格

段に腕があがり、音楽をきわめることになった。花々への思いを千次は一心に胡弓にこめたのだった。花々にしても同じで、胡弓の音は千次そのもので、もはや胡弓なしでは生きていけなかった。二人はしあわせだった。

さて、白天山には龍神がすんでいた。龍神は見目うるわしい花々に目をつけ、妻にしてしまおうと思っていた。それを知った千次と花々は、遠い山の中に逃げ、身をかくした。しかし、千次が胡弓をひけば、その音ですぐに見つかってしまった。二人は黒の洞窟に逃げこんだ。

地の底で二人はひっそりと暮らした。千次にとっても花々にとっても、一日に一回も胡弓の音にふれないことは、息を止めよ！といわれていることと同じで、苦しみ以外のなにものでもない。千次は、小さな音で胡弓をひきはじめた。小さな音でも、千次の胡弓はたしかかな音で、地の中を響き、龍神の知るところとなった。とうとう花々は龍神にさらわれてしまった。

花々は白天山の龍神のやしきにとじこめられた。逃げよ